

春 秋



平成16年3月 第26号

三重大学春秋会 発行

目 次

「春秋」26号

三重大学・退官教官の会「春秋会」機関誌

—2004・1—

大塩平八郎の乱と大阪の大火	水越允治	1
作物のスケッチ(3)	塩谷格	5
釣りのことなど	野上阜三博	12
ドラキュラの足跡をたどる旅	玉置維昭	15
古座川のほとりで	木下威	20
一言申し上げます	吉村貢	24
夏山登頂記	堀場義平	26
老人ホーム生活の記	渋谷欣治	29
病気の成り年、当り年	榊原慎吾	31
俄か遍路の記	葛原定郎	34
お経と御詠歌を習う	菊岡武男	37
「懐かしさ」ということ	濱田滋子	40
春秋閑語(22)	荒井瑞雄	42
西域紀行—2001—	吉田洋一	43

* 春秋会記事 *

春秋会総会など	63
平成14年度 決算報告	64
平成15年度総会(2003. 11. 28、洞津荘)の議事内容について	65
編集後記	70
付 録 春秋会会員名簿	72

表紙題字「春秋」: 三上美樹

表紙画: 吉田洋一

お経と御詠歌を習う

菊 岡 武 男

1 私の菩提寺

私の菩提寺は津市北丸の内にある真言宗醍醐派延命山福満寺(本尊は延命地藏菩薩)で、古地図を見ると、昔は大きな敷地を擁する寺であったが、今は檀家数も少ない小さな寺に変貌している。

私は約20年前から檀家総代で、真言宗醍醐派管長から「任責任役員」という辞令を頂戴して今日に及んでいる。

2 前住職夫妻の願い

現住職は寺を継いでからまだ2年目である。前住職夫妻(夫人も僧籍である)は十数年前から開かれた寺を目指し、例えば車椅子のまま本堂へ入れるように本堂玄関にスロープをつけたり、あるいは愛するペットを失い途方にくれる人々を慰めようと、本堂横にお地藏さんを建立し、宗派を問わず誰でも参詣出来るようにされた。また檀徒の交歓を目指し、その一環としてお経と御詠歌の学習会(毎月それぞれ1回)を提案された。

3 お経の勉強会

前住職夫妻の呼びかけに応じたのは約10名で、私たち夫婦も参加することにした。テキストは手の平大の小さな「朝暮勤行次第」という本である。

定められた日時にお寺の畳敷きの客間に集まり、住職の声に合わせて大きい声で唱和する。唱える内容は礼拝真言から始まり、開経偈、般若心経、十三仏真言、光明真言などであり、御宝号は7回唱え、最後に廻向文を唱える。

1回唱える時間は30分余で、正座の足が痛むが、唱え終わるとえもいわれぬ爽快感を覚え、ゆったりした気分になり、またお経の抑揚の調子も会得できる。つづいて前住職夫人からお経に関する新知識を授けていただき法悦の喜びに浸る。そのあと休憩し茶菓を頂戴する。

休憩のあと一同は本堂に移り、本尊に向かって正座する。仏壇には蠟燭が灯され、線香が立てられる。住職は着座の儀式を済ませてお経を唱える。それに合わせて一同は唱和する。その間、順次焼香する。最後に住職の挨拶があり、その日のお経の勉強

会は終わるのである。

4 ご詠歌の勉強会

1) 檀家への呼びかけ

前住職夫妻が御詠歌の勉強会を檀徒に呼びかけられたのは、津市内にある真言宗の寺の住職夫人（僧籍がある）から「講師を務めても良い」との朗報があったからである。

参加者はお経の勉強会のメンバーと重複しているお方が多く約10名で、前住職夫妻も生徒である。私たち夫婦も生徒になった。

2) ご詠歌の法具

講師の指示に従い高野山金剛流御詠歌經典綱要、同御詠歌和賛集及び同御詠歌經典を用意した。そのうちの御詠歌經典綱要によると法具とその取り扱い方が詳細に説明されている。要約するとつぎの通りである。

鉦 鉦鈺（しょうこ）と称し右膝先に置く。

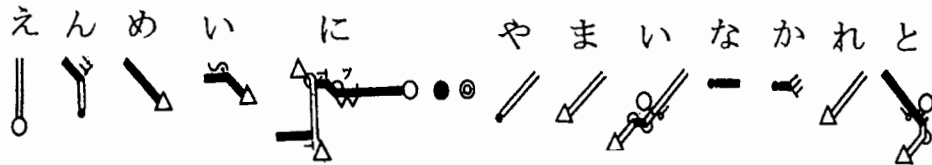
鉤杖（しもく）鉦鈺を打つ木製のT字型の道具で、鉦に添えて置く。なお鉤杖には杖索（ひも）と称する結び紐が付いている。

鈴 金剛鈴（こんごうれい）と称し、左膝先に置く。また鈴の柄には鑲房（くみふさ）を掛ける。

このほか、袈裟、念珠、教典を含め法具と称している。

3) 御詠歌の楽譜

教典を見ると御詠歌独特の楽譜が示されていて愕然とする。試みに福満寺本尊の延命地藏菩薩の御詠歌の冒頭部分（延命に病 [やまい] なかれと）に「揚流」というメロディで楽譜をつけると下図のようになる。図中の○印及び△印はそれぞれ鉦を打ち鈴を振る位置を示している。



楽譜を見て音声を発することは到底出来ないで、講師の音声を真似て声を出さざるを得ないが、生来の音痴の私にはそれも大変苦痛であり閉口している。

幸い、与えられた詠題ごとに講師が吹き込まれたテープを入手できるので、それを教材として学習している。

4) 所作 鉤杖

鈴を持つ左手の腕を目の高さに保ちながら右手に鉤杖を握り、楽譜にしたがって唄いながら鈴を振り鉦を打つ。鈴は一音鳴らすだけで、チリンチリンと鳴らしてはいけない。

また歌う途中で鈴や鉤杖を巧妙に回す所作があり、運動神経が鈍くかつ生来の音痴である私にとっては難行苦行である。なお唄い終わるまで4分以上もかかる詠題もあり、その間、鈴を目の高さに保つのは大変苦しい。

5) 御詠歌の勉強会

毎月1回、決められた日の午後1時からお経を習う同じ部屋で学習する。講師の左右に向き合って見台の前に座り、鈴と鉦を所定の位置において講師を迎える。

講師から与えられた詠題の楽譜にしたがい一節ずつ合唱し、講師から懇切丁寧な指導をしていただきながら、何回も反復練習する。

暫時休憩のあと、一同は本堂に進み、本尊に向かい二列に並ぶ。稽首礼拝（けいしゅらいはい）という様式で本尊に向い礼拝し、4詠題を歌う。そのあと講師からまた親切な指導を受けてその日の勉強会を終えるのである。

また前住職夫人の発議で、毎月1回、生徒だけで講師のテープを聞きながら一歩でも上達するよう勉強会を続けている。

なお、今までに学習した詠題は「福満寺御詠歌」、「宗歌いろは歌」ほか9詠題に達している。

5 結びに代えて

纏めようもない駄文を羅列し、「春秋」紙面を汚した事をお許し願いたい。お経と御詠歌を学習して得られたものは何かと問われても答えに窮するが、私は自分なりに納得しているつもりである。

腹の底から大声を出して唱えるお経は安心立命の喜びに浸ることが出来る。また御詠歌独特のメロディは、音痴の私にも得も言われぬ恍惚とした愉悦を与えてくれる。また勉強会でお会いする皆さんとの交歓も楽しいものであり、体力の許す限り続けていきたいと願っている。

(平成15年9月20日)